東海新報　平成21年(2009年)4月21日（火曜日）

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部創立10周年に寄せて

リレーエッセイ ㊱

予感する半世紀ぶりの登山

住田町上有住　加藤　貫時

森に息吹を感じ、木々の個性そのままに表出される新緑の季節を迎えて丸二年になる。いま私は、妻の生まれた住田町上有住に住んでいる。ここにきて気になり出したことがある。

高校生の時から撮りためた写真が「いっぱい」あることだった。もし私が死んだとき、遺品片づけに途方に暮れるのではないかと娘のことが心配になった。

写真に写っている多くの人々と「娘」とは何のかかわりもない。どこの誰かも知らない人の写真が多く出てきても困るのは「娘」だけだと結論したのである。

永い時を経て蓄積されてきた写真は時代を映し出し、そのことに価値があるのかも知れない。「それでも」と思う。日の目を見ずに処分される写真であったら、写真を撮った自分が引導を渡すのが自然だろうと思った。

昨年十二月はじめ、五葉山自然倶楽部の忘年会で「五葉山の魅力」（リレーエッセイ）の執筆を勧められたが、ネガも写真もすでに灰になっていたのである。ただ記憶されたそのときの情景は残っている。

あれは、中学校で一年から三年まで担任していただいた、土川昭平先生と私たち十六歳の高校生の六人で五葉山登山をした時のことだ。上有住檜山の登山口に着いたその日は晴天であった。

が、この登山口の小屋で泊まった朝は、暗い内から全員目を覚ましていた。これ以上ないと思えるほどの土砂降りであった。飯ごうで朝ご飯を作り、缶詰をあけて朝食。夏休みはじめで梅雨末期の集中豪雨という感じだった。

あまりにすごい雨に、「先生どうしますか」と恩師に登山できるかどうか判断を求めた。高校生は全員学生ズボンにワイシャツ、履き物は通学用のズック靴、そして学生帽。どう見ても登山向きの服装ではない。しかし、それがこの時代の精いっぱいの姿であった。

全員での協議結果は「登山をする」であった。七人全員が一致した。外に出たら十秒もしないうちにびしょびしょになることは分かっていたが登山決行である。視界は十㍍くらい、首にタオルを巻いて登山道を駆け登る。登山道は激しい雨で川になっている。

無我夢中で走り続ける。見えるぎりぎりの先を見据えて駆ける。巨木に囲まれた林を進むとやっと登山道は緩やかになる。稜線が近い。

しかし、強い雨と濃いガスで見通しが全くつかない。気がつくとハイマツに風景は変わっていた。このハイマツの林を進んでいくと石の祠を発見した。石の祠にタッチし迷わずに下山できることを願う。

視界が利かず下山途中でバラバラになってしまった。誰がどこにいるのか分からない。不安と焦燥の下山となったが、全員無事に登山口の小屋にたどり着いていた。

「五葉山ってどんな山か」と聞かれると困るのである。「ハイマツと祠（ほこら）」しか見えなかったからである。

妻が生まれ里の上有住に帰りたいと言った時、五葉山の山頂から眺望できる素晴らしい眺めを想像しながら、移り住むことに同意した。心密かに五葉山登山が堪能できることを期待したのである。

上有住に来て三年目を迎える。今年あたり五葉山登山ができそうな予感がする。頂上部の日の出岩に半世紀前の〝高校生〟〝恩師〟にきっと会えそうな気がする。

その瞬間、脳みそに眠っていた記憶が一気に目を覚ますだろう。それぞれの出会いの場面を刻んだ写真の思い出とともに。

「登山に連れてって」と頼みたい山の仲間たち。今年は半世紀ぶりの五葉山登山が目標

【執筆者プロフィール】住田町上有住在住、六十七歳。宮城県唐桑町小原木（現気仙沼市）生まれ。小原木中学校で三年間担任していただいた土川昭平先生（仙台市在住）との交流が続く。今年、半世紀ぶりの五葉山登山をめざす。登山歴は「八ケ岳ほか、ほんの少し」という。